

「異己」の理解と共生

—故森茂岳雄先生と日中の相互理解—

釜田聡

2024年(令和6年)3月11日(月)の朝、研究者仲間から「森茂岳雄先生が昨日10日(日)に旅立たれました」との報を受けた。

3月6日(水)のオンラインお見舞いの際には、お元気そうにお話をされていたので、あまりにも突然の報であった。

森茂岳雄先生は、2024年1月末新潟県上越市で開催された「異己」理解共生授業プロジェクト(以下、「異己」プロジェクト)研究会に参会された。また、2月上旬には私と森茂岳雄先生とで、3月上旬に熊本の小学校で行われる研究会参加のための日程調整をしていた。このような経緯があったので、しばらく心の整理がつかなかった。

筆者は森茂岳雄先生から主に日本国際理解教育学会でご指導・ご教授いただいた。特に、2013年に始まった「異己」プロジェクトを通じて、国際交流の在り方と研究交流について親身になってご教示いただいた。また、森茂岳雄先生のご家族の皆様とも交流する機会をいただいた。サンフランシスコやプラハ、パリ、廈門、紹興、上越などで、ご家族の皆様と共に過ごしたお時間は、私にとってはかけがえのない思い出になった。

森茂岳雄先生は、日本社会科教育学会の会長や日本国際理解教育学会の会長をはじめ、多くの学術研究団体や教育研究機関、教育行政等において重責を歴任された。

ここに追悼文を書かせていただくことになったが、森茂岳雄先生の教育研究活動、社会貢献活動等のすべてをカバーするものではなく、主に日本国際理解教育学会での森茂岳雄先生のご活躍と「異己」プロジェクトを中心に記述することをご容赦いただきたい。

1 日本国際理解教育学会

森茂岳雄先生は、日本国際理解教育学会の会長を3年間務めるなど、学会の中核として学会の運営に携わってきた。

日本国際理解教育学会での委員・役員歴等は次のとおりである。

- ・会長1期3年(2019年度～2021年度)
- ・副会長2期6年(2010年度～2015年度)
- ・常任理事3期9年(2004年～2009年、2016年～2018年)
- ・理事1期3年(2001年～2003年)
- ・事務局長2期6年(2010年度～2015年度)

2001年度の理事就任から2021年度の会長職を終えるまでの20年間、日本国際理解教育学会活動に献身的にご尽力いただ

いた。

この間、日本国際理解教育学会が企画編集した研究書籍・事典等は次のとおりである。

- ・『現代国際理解教育事典 改訂新版』(2022、明石書店)
- ・『国際理解教育を問い直す 現代的課題への15のアプローチ』(2021、明石書店)
- ・『日韓中で作る国際理解教育』(2015、明石書店)
- ・『国際理解教育ハンドブック グローバル・シティズンシップを育む』(2015、明石書店)
- ・『事典 持続可能な社会と教育』(2019、教育出版)
- ・『現代国際理解教育事典』(2012、明石書店)
- ・『グローバル時代の国際理解教育 実践と理論をつなぐ』(2010、明石書店)

これらの研究書籍・出版物の大半は、日本国際理解教育学会が総力を結集して発刊したものである。森茂岳雄先生が編著者になり、それぞれの企画立案、編集作業、執筆を担当している。筆者自身も、編著者の末席に名前を加えていただいたことがあった。森茂岳雄先生は、編集作業中でもいつも穏やかな表情で、時折、ユーモアを交えながら、編集作業で疲れている私たちを和ませることがあった。一方で、議論が紛糾しているときには、的確に方向性を示していただいた。そのときの森茂岳雄先生の一言一言からは、学問を極めようとする研究者魂と、私たちのような次世代を鍛えようとする温かさを感じることができた。

その他、森茂岳雄先生は国際理解教育や多文化教育、社会科教育を中心に多方面にわたってご活躍された。そのご業績のうち、最近の研究成果の一部を紹介する。

- ・『国際理解教育と多文化教育のまなざし 多様性と社会正義／公正の教育にむけて』(2023、明石書店)
- ・『「人種」「民族」をどう教えるか 創られた概念の解体をめざして』(2021、明石書店)
- ・『社会科における多文化教育 多様性・社会正義・公正を学ぶ』(2019、明石書店)
- ・『真珠湾を語る 歴史・記憶・教育』(2011、東京大学出版会)
- ・『学校と博物館で作る国際理解教育 新しい学びをデザインする』(2009、明石書店)

書名にも見られるように、森茂岳雄先生は、多様性を理解し尊重することを重視し、社会における公平・公正とは何か、社会における正義とは何かを探究し続けてきた。これらの研究成果には、人間愛・人類愛が通底している。



(中国寧波ノッティンガム大学附属高等学校：「異己」プロジェクトの研究交流会 (2023年10月30日(月)))

2 「異己」プロジェクト

「異己」プロジェクトは、日本国際理解教育学会国際委員会が2013年度の事業活動として立ち上げたプロジェクトである。当時の国際委員会では、「このような時代、日中の研究者と教育実践者、児童生徒、学生の交流の場をつくるべきだ」と共通理解が図られた。その後、国際委員会の委員の一人であった姜英敏氏（北京師範大学）の提言（「異己概念を使って、日中の協働研究を進めてはどうですか」）を受け、国際委員会の総意で「異己」プロジェクトを立ち上げた。

当時、森茂岳雄先生は日本国際理解教育学会の副会長であり、学会の事務局長でもあった。国際委員会の打合せの際には、必ずといってよいほど同席し、私たちの話し合いの内容を聞き入ってくださいました。打合せの後、「異己」プロジェクト予算や実践校についてなど、親身になって相談にのっていただいた。あるとき、「研究者や教育実践者、児童・生徒、学生の交流のためには、研究予算の確保も大切だ」と助言していただき、森茂岳雄先生ご自身も外部資金関係者にかかけあっていただいた。森茂岳雄先生のご尽力もあって、何度か外部資金を得ることができ、「異己」プロジェクトを推進することができた。

「異己」プロジェクトの中心概念である「異己」については、姜英敏（2014）は、次のように説明する。

「異己」は、中国の歴史書籍に記載があった単語で、『後漢書』に初めて見える。当時東漢の摂政をしていた董卓は都を長安に移そうと

したが何回も朱俊に公然に反対され、朱俊を「異己」とみて忌憚しながらも、その名声を恐れ、「太仆」の官職を与えたが数回にわたり拒否され、結局二人は戦うようになったと記載されている※ 1。さらに、14世紀に書かれた「宋史・岳飛伝」では宋と金が終戦に向け講和に入った際、当時の主和派の宰相秦檜が主戦の岳飛を「異己」と捉え、その影響力を危惧し謀略を使って岳飛を弑害したと記載されている※ 2。それ以来にも数々の歴史文献で「異己」が使われたが、「異己」とは、価値観が異なり、政治的に対立あるいは敵対する立場にいる派閥、武装勢力、利益集団が互いを指す言葉であった。

※ 1 《后汉书》卷七十一・皇甫嵩朱俊列传。「时、董卓擅政、以俊隽宿将、外甚亲纳而心实忌。及关东兵盛、卓惧、数请公卿会议、徙都长安、俊辄止之。卓虽恶俊异己、然贪其名重、乃表迁太仆、以为己副。」

※ 2 《宋史・岳飞传》卷三百六十五列传第一百二十四：「时和议既决、檜患岳飞异己。」廖盖隆、孙连成、陈有进、郭继严、康绍邦（1993）『马克思主义百科要览（上卷）』北京：人民日报出版社、251頁

私たちは、こうした定義を現実の学校教育や社会に適用させるため、「異己」を次のようにとらえた。

「異己」を価値多元化社会において異なる価値観や立場をもつ相手を意味し、個人から国家間のコンフリクトを解決す

る概念として注目した。

「異己」を敵ではなく「異己」とする理由は、「異己」のもつ弁証法的な特徴が「敵」では現れない特殊な状況表現しているからである。「異己」は「外敵」ではなく、同じ集団の中において、お互いに避けられない場合に限定して使う。例えば、部下、同僚、利益関係にある知人などである。

次に、個人対個人ではなく、利益や価値観が異なる集団間でそれに伴う違和感や敵対関係が構築される状況をさす。たとえそれが個人間の葛藤であるように現れても本質的にはその背後にある集団が投影される。

最後に、政治闘争の中で「異己」がすべて粛正されることは異なる考え方も持つ相手が存在しないことも意味し、そのような絶対的支配は自分の存続に危機をもたらすことになるので、自己集団存続の前提として「異己」は常に存在する。まさに「異己」は「異なる自分、内なる他者」ともいえよう。

私たちは、このような「異己」のとらえをした上で、学校教育と「異己」の関係を検討した。

一人ひとりの児童・生徒にとって、学年・クラスという集団は、ある特定の期間・空間において共に生活する単位であり、基本的に避けられない人間関係を内包する。この集団内に内包する「異己」を可視化し、「異己」との対話を促すことは、他者の存在を認め、他者を尊重する基盤になると考えた。

このように他者を理解し、他者との共生を目ざす教育研究活動は、現在の学校現場では喫緊の教育課題の一つとなって

いる。まさに、ここに「異己」プロジェクトの存在意義がある。

3 「異己」プロジェクトの成果

成果として、日中の価値判断基準が異なる授業教材（友情と所有に関する教材）を開発し、次の4段階の授業プロセスが確立したことがあげられる。

(1) 事前のアンケート調査

教材にかかわる事前調査を行い、その結果をグラフ化する。

(2) 「異己」の存在の認識と対話

(1)の結果を見て、集団内に価値判断基準が相反するグループがあることを認識する。また、多数派と少数派との対話を促す。

(3) 国境を超えた「異己」との対話を促す。

国境を超えた他集団との対話を促し価値判断基準が逆転していることを認識する。

(4) 国境を超えた「異己」との対話を通じて共生へのアプローチを創出する。

価値判断基準が逆転する人々・集団との交流の在り方、共生の在り方について個人・集団間で考える。

このような教材と授業プロセスを活用し、これまで日本や中国、韓国で授業研究会及び研究交流を積み上げてきた。成果として、次の2点を挙げたい。

1点目は対象国・地域の広がりである。

最初は日本と中国、次に韓国をまじえての三カ国で研究を進めてきた。最近では、森茂岳雄先生の古くからの友人の手配で、デンマーク・コペンハーゲンでも授業実践・研究協議が行われている。

2点目は、一般化に向けてである。

「異己」プロジェクトの研究成果は主に日本と中国の学会誌や書籍等で公表してきた。また、日本と中国の教員研修等でも活用されている。着実に一般化及び普及に向け、準備が整ってきた。



(中国寧波ノッティンガム大学附属高等学校での講演会 (2023年10月30日))

(月))

4 森茂先生のご遺志を、未来に

現在、私たちは2024年度を「異己」プロジェクトの節目の年と位置付けている。森茂岳雄先生からのご指導・ご教示を受け止め、「異己」プロジェクトの成果をまとめ、世に問う重要な1年になる。森茂岳雄先生のご遺志でもある「異己」プロジェクトの集大成に向け、全力を尽くしたいと思う。

森茂岳雄先生、どうか天国から私たちのプロジェクトをお見守りください。そして、「異己」プロジェクトの研究書籍が刊行された暁には、一緒にお祝いをしましょう。

引用・参考文献:

- (1) 釜田聡・姜英敏(2014)「報告/国際委員会 日本・中国「異己」共同授業プロジェクトの概要」『国際理解教育』20巻、明石書店、96-100頁。
- (2) 釜田聡(2021)「第15章日韓中共同プロジェクトが提起する課題に国際理解教育はどう応えるか」日本国際理解教育学会『国際理解教育を問い直す：現代的課題への15のアプローチ』明石書店、230-244頁。
- (3) 釜田聡(2023)「「異己」との共創をめざして」、森茂岳雄監修『国際理解教育と多文化教育のまなざし』明石書店、2023、192-205頁。

(勤務先：上越教育大学)